論　文

ワイン王とポテト王—長沢鼎と牛島謹爾

森　孝晴

1．ポテト王，塩鮭王，ワイン王

九州には明治期に北米（アメリカとカナダ）で「王」と呼ばれた成功者が３人いた。一人目はアメリカのカリフォルニアで「ポテト王」と呼ばれた牛島謹爾（きんじ）で，二人目はカナダで「塩鮭王」と呼ばれた，日系カナダ移民第１号の永野萬蔵であり，３人目は「ワイン王」と呼ばれた日本人アメリカ移民第１号で薩摩藩英国留学生の長沢鼎である。

「塩鮭王」永野萬蔵は，現在の長崎県南島原市口之津町の出身で，幕末に漁師の四男として生まれた。彼の家はあまり豊かではなかったようで，永野は海外で一旗揚げて豊かな暮らしをすることを夢見た。そこで彼は，決死の覚悟で渡航に挑み，船に乗り込んで英国商船の水夫見習いになった。この点は牛島や長沢と違って，かなり苦労している。

永野は，1877（明治10）年にカナダ・ブリティッシュコロンビア州ニューウエストミンスターに上陸した。彼はここで船から逃亡し，入国許可もパスポートもない状況でカナダに入国し，数年間サケ漁の漁師として働いた後に，大都市バンクーバーに出た。その後は職を転々とし，最後に再びサケ漁の仕事に戻った。30歳頃のことだった。

その後永野は，「ドッグサーモン」という種類のサケに目を付け，これを塩漬けに加工して日本に輸出しようと考え，事業を成功させていった。彼は，尊敬の念を込めて「塩鮭王」「カナダ大尽」「サーモン・キング」などと呼ばれたそうだ。

サケ漁で成功した永野は事業展開を図り，1894（明治27）年に横浜に西洋料理店を開いたり，カナダのビクトリアに日本美術雑貨店を出店したりして，バンクーバーの大通りに大きなビルを持つまでになったが，その後排日運動の対象になってしまう。

日本人の漁業の権利が制限され，永野はビクトリア日本人会を設立するなどして，日系移民の利権を守るための運動を起こしていくなどしたものの，1922（大正11）年に不審火によって事務所が全焼してすべての財産を一度に失ってしまう。そして，失意の中妻とともに帰国した永野は口之津の自宅で肺結核により死去した。

2．「ポテト王」牛島謹爾

中畑義明作成の年表と『九州王国』によって牛島謹爾の人生をたどる。彼は，1864（元治元）年１月６日に現在の福岡県久留米市に農家の三男として生まれた。年少期は負けん気の強い子供だったそうだ。歴史ある農家の旧家に生まれ育った牛島だったが農業よりも学問に関心を持つようになり，漢学で身を立てる決意をして14歳の時に士族牛島萬作の養子になる。さらに17歳で北汭義塾に

キーワード：Wine King, Potato King, 長沢鼎，牛島謹爾

入塾し，1885（明治18）年，21歳の時には漢学者を目指して上京して二松学舎に入学する。

東京の近代化を目の当たりにした牛島は実業こそ自分の目指す方向と悟り，漢学から転向して1886（明治19）年に東京高等商業学校（現在の一橋大学）の予科・東京英語学校に入学した。翌年東京商業学校を受験するが不合格となった牛島は，実業関係を学ぶため米国に私費留学を決意し，資金提供を受けたうえで1888（明治21）年12月８日に渡米した。24歳の時であった。

翌年１月と思われるが，25歳になった牛島はサンフランシスコに到着する。彼はこの地で貿易会社に滞在した後，英語を学びつつ皿洗いなど様々な仕事を経験した。その後牛島は，農業労働者として働き，1890（明治23）年，26歳の時にはアメリカ人の食卓にはジャガイモがよく出ていることを知り，ジャガイモ栽培の事業化に目標を定めた。

この年，カリフォルニア州サンオーキン郡に移った牛島は，空いた土地を借りてジャガイモの試作をするなど栽培法を修得していった。まじめに働いて地元の信頼を得た彼は，本格的にジャガイモ栽培に打ち込んでいき，未開発の湿地帯に目を付けた。1891（明治24）年，27歳の時には兄覚平（34歳）をアメリカに呼び寄せ，その知識と経験に支えられながら土地を次々と開墾していった。

牛島は30代で1300エーカーもの広大な農場「牛島農園」を経営する実業家となり，ジャガイモの大量生産に成功する。その後農地は4500エーカーにまで拡大し，総生産量はカリフォルニア州全収穫量の約85パーセントを占め，アメリカ全土の約１割に及んだという。安定を得た彼は，1900（明治33）年，36歳の時に一時帰国して結婚した。農園は順調であった。

しかし牛島が40歳になる1904（明治37）年（日露戦争開戦の年）頃から雲行きが怪しくなる。排日運動が起こるのである。排日の動きは1886年頃から見られたが，日本人は白人労働者たちにとって自分たちの雇用を奪う厄介な存在とみられて迫害が始まり，1907（明治40）年には第一次排日土地法が議会を通過する。こうした排日運動に対抗して，牛島を中心とする有志により1908（明治41）年に在米日本人会が設立され，牛島はその初代会長に就任し，このころ出会った渋沢栄一の力も借りて日米親善を図ろうとした。

牛島は，渋沢の協力で日本の政財界の著名人を派遣してもらい，排日運動の鎮静化を図った。渋沢が渡米した折には牛島がアメリカ側の有力者との橋渡しをしたそうだ。しかし彼の努力にもかかわらず，1913（大正２）年には第二次加州排日土地法が通過し，1924（大正14）年には連邦議会で排日移民法が成立するなど事態は悪化していった。

1926（大正15，昭和元）年３月に日本に帰国する予定にしていて，久留米に豪邸を建設していた牛島は，帰国直前に脳溢血で倒れ，27日にロサンゼルスのハリウッドで死去した。牛島は渋沢と共同で中国に銀行を設立する計画を立てていて，日本に戻って事業を始めるつもりだったようだ。1926年４月にはサンフランシスコで在米日本人会主催の追悼会が開かれ，５月には渋沢，高橋是清，東郷平八郎，後藤新平らが主催する追悼会も挙行されている。なお，サンフランシスコ空港に近いコルマ駅近くにある日本人共同墓地には，牛島の死を悼んで建てられた巨大な石碑がある。牛島農園があったサンオーキンには牛島が呼ばれていた「ジョージ・シマ」に由来する「シマ・センター」があり，彼の功績をたたえ続けているそうだ。

中畑義明によれば，牛島は「自らが農業従事者として働くよりも農場経営をする実業家としての才気に満ちた人物」であり，「時流を見抜く目を持ち，目標を決めたらぶれずに邁進する性格」の持ち主だったそうだ。

3．長沢鼎と牛島謹爾の接点

筆者は長沢と牛島の関係について拙著『長沢鼎　武士道精神と研究者精神で生き抜いたワインメーカー』においてこう書いた。

> また，「ジャガイモ王」として知られたジョージ・シマ（牛島謹爾）とも交流があり，もう一人の農業経営における日本人成功者であるシマは，カリフォルニア州セントラル・バレーの自宅にたびたび長沢を迎え入れた。

二人には，どちらも農業経営者であったことやどちらも留学生としてアメリカに渡ったことなど，「王」と呼ばれたこと以外にもいくつも共通点があるが，二人の関係には拙著で示した何倍もの深さがあった。

まず二人の人生を対比しながら年次的に追ってみよう。生年は，長沢が1852（嘉永５）年，牛島が1864（元治元）年で，長沢が12歳上である。長沢がイギリスに渡ったのが1865（慶応元）年で，アメリカに渡ったのは1867（慶応３）年であるが，牛島がアメリカに渡ったのは1889（明治22）年だから，長沢が留学生としても移民としても大先輩である。

牛島が渡米したころ，長沢のファウンテングローブワイナリーは既に順調に発展していた。1887（明治20）年には，長沢はカリフォルニア大学の委嘱によりワインの改良に協力しているし，ファウンテングローブの全建物が完成したのは1890（明治23）年であった。この年に牛島はジャガイモの試作をしており，翌年には兄を呼び寄せ開墾を開始している。

牛島が開墾を始めた1892（明治25）年には，長沢に大きな事件が起こっている。父とも慕っていたハリスが，シュバリエ事件にショックを受けて妻ジェーン・ウェアリング（長沢が母のように慕った「ダビーおばさん」）とともにニューヨークに戻ってしまったのだ。これにより長沢は40歳にして土地と醸造所の管理を任されることになる。

上記したように，牛島の開墾は順調に進み，1901年頃には彼の農場「牛島農園」は1300エーカーにも広がり，その後は4500エーカーまで拡大した。実業家として成功した牛島の農園の総生産量はカリフォルニアの収穫量の85パーセントを占めた。一方，長沢は1889（明治22）年段階で400エーカーのブドウ畑を持ち，彼のファウンテングローブワイナリーのワインはカリフォルニアで生産されていたワインの約8.2パーセントにまで伸びた。長沢のワイナリーはカリフォルニアの10代ワイナリーの一つであり，彼の出品したカベルネ・ソービニョンは1893（明治26）年に開かれたカリフォルニア州ワイン・コンテストにおいて832のワイナリーの中で２位に輝いた。

つまり，19世紀末には長沢も牛島もカリフォルニアを代表する農業実業家となっていたのであり，このころから２人の接点が出てきたのであろう。州内で有名な事業家同士であるとともに，お互いブドウやジャガイモの栽培研究に没頭してきた日本人同士であるので，二人が知り合うには時間はかからなかっただろう。それだけではなく，二人は家族ぐるみでまるで親友のように付き合ったのである。

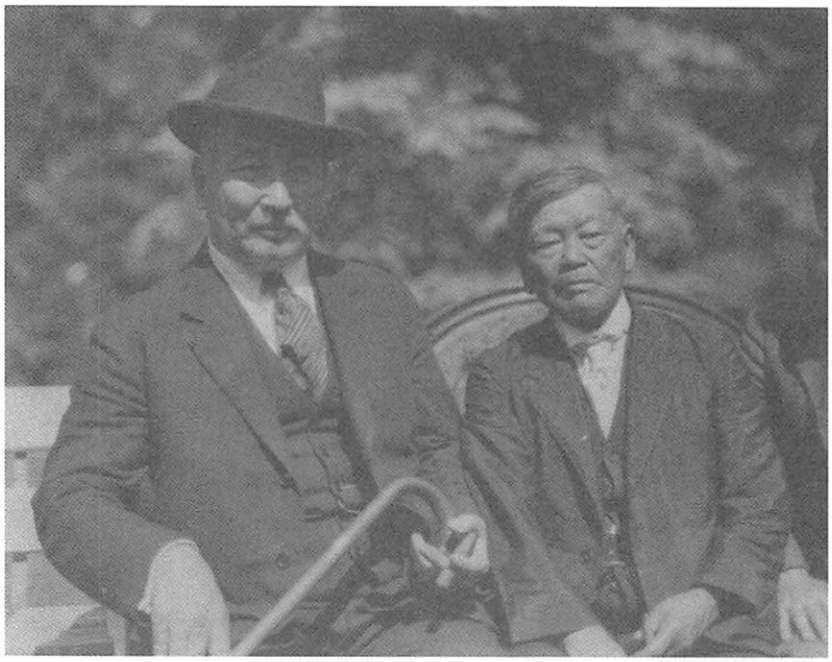
その後の二人の足跡も追いかけてみよう。1896（明治29）年に甥の伊地知共喜を農場に迎えて家族を作った長沢は，ハリスが1906（明治39）年に亡くなって1911（明治44）年には全ファウンテン

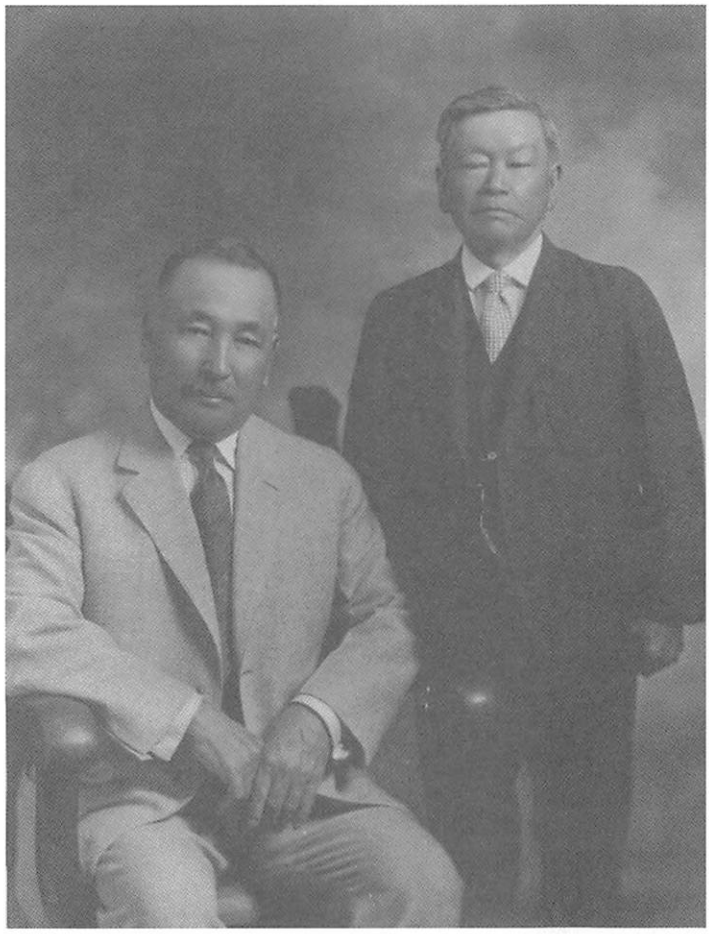
グローブが彼の所有となり，人生の頂点を迎えることになった。一方牛島は1908（明治41）に在米日本人会（長沢も主要な会員の一人であった）の会長となり，排日運動に抗していくことになる。開墾を進める一方で，渋沢栄一などの力を得て対米関係改善に尽力していく。

長沢は1915（明治４）年にはサンフランシスコで開催された万博で農産物の審査員をするなど高く評価されたが，禁酒法で打撃を受ける。排日運動の中で資金繰りなどにも苦しみ，1934（昭和９）年に82歳でなくなった。一方牛島は排日運動の緩和のために動きまわるが，ついに1924（大正13）年に排日移民法が成立してしまい，いよいよ帰国を決意し船の予約も取った。しかし，1926（大正15，昭和元）年に62歳で，帰国直前にロスアンジェルスで死去した。

３．長沢と牛島の交流

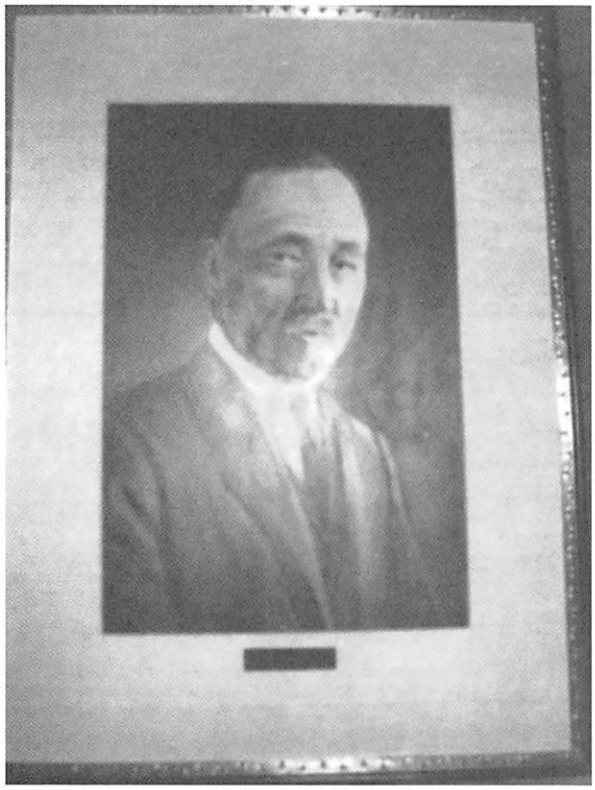
長沢と牛島の親密さを物語る写真がいくつも存在する。まず，いちき串木野市にある薩摩藩英国留学生記念館が所蔵する長沢所有のアルバムにはわざわざ普通の倍以上に引き伸ばした二人のいわゆるツーショット写真が２枚ある。





どちらも同時期に取られたと思われ，長沢は70代後半～80歳くらい，牛島は50代末～60歳くらいだろう。体の大きい牛島の方が堂々として見えるが，長沢も相変わらずスキのない顔をしている。よほど親しくなければ，特に長沢の場合は，このような写真は取らないだろう。

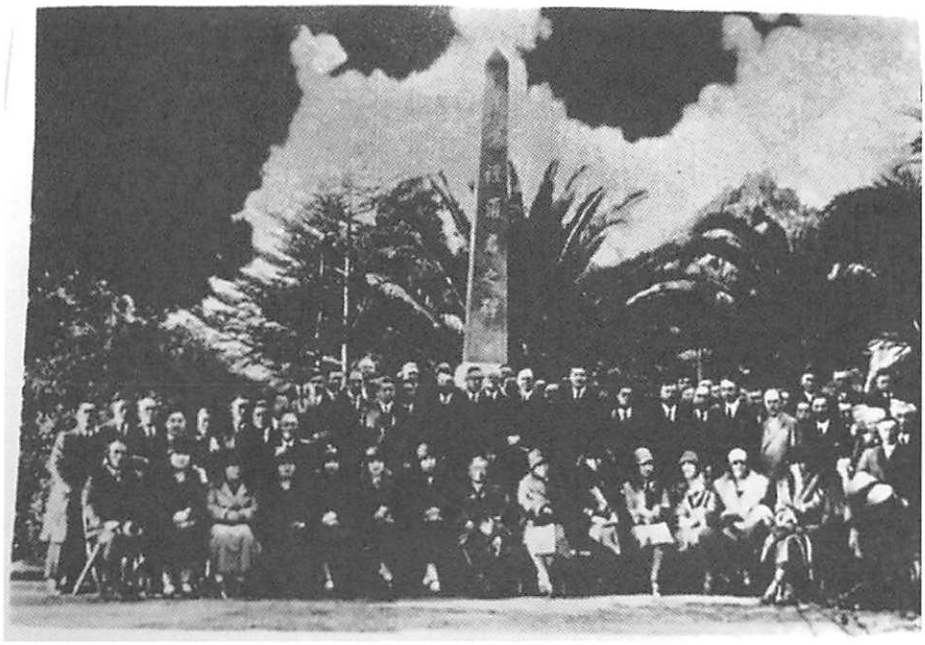
鹿児島国際大学の長沢資料の中にも，長沢所有の写真が多数あり，その中に牛島の写真が２枚ある。



上の写真は牛島が50歳前後の頃のものと思われ，下の写真は排日移民法成立後の晩年の写真である。これらを長沢がもっていたことも彼の牛島への思いを感じさせる。

晩年の二人は特に親しかったらしく，1926（大正15，昭和元）年に牛島が亡くなると長沢は，伊地知共喜とともに（おそらく共喜の運転で）ロスアンジェルスまで行き，長老教会で行われた牛島の盛大な仮葬儀に出席している。以下に示すのがその写真である。

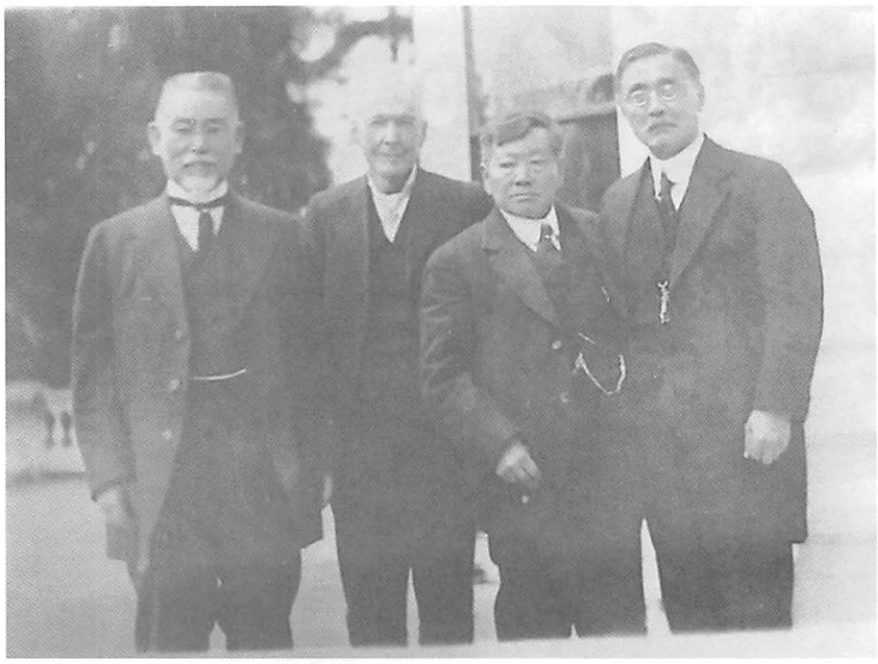
右から11番目に写っているのが長沢でその左上にいるのが共喜である。長沢74歳の時だ。また，長沢は，その２年後の1928（昭和３）年にサンフランシスコ郊外のサンマテオで盛大に行われた牛島謹爾之碑除幕式にも駆けつけている。以下の示すのがその時の写真である。



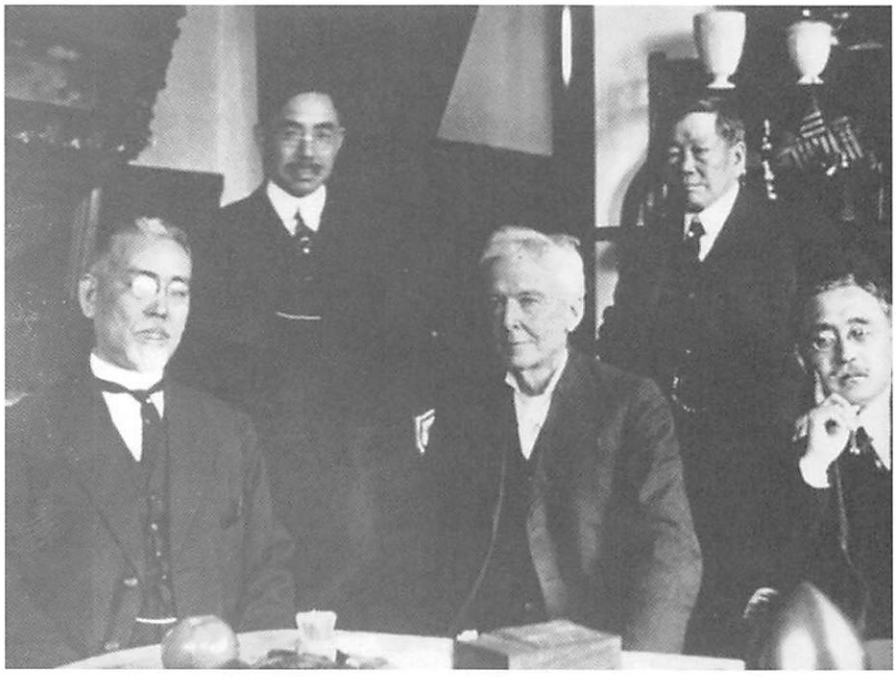
長沢が前列のど真ん中に座っていることが二人の関係を物語っていよう。これら２枚の写真は牛

島研究家の中畑義明の提供によるものだ。

次の中畑提供の写真は彼によれば，排日政治家との懇談をするために牛島が新渡戸稲造と後藤新平を招聘した際に長沢鼎を訪ねて撮った写真だそうである。



一番右が新渡戸稲造で左端が後藤新平である。ちなみに長沢に左隣にいるのは彼の親友ルーサー・バーバンクである。実はこの時の写真はもう一枚ある。



これは筆者の拙著に掲載したものだ。後藤の右後ろに立っているのは西晴彦領事館補である。２枚の写真共，皆同じ服を着ているところから見て同じ時に長沢邸で撮ったものであろう。渡辺正清によれば，これら２枚の写真は，1919（大正８）年３月，長沢67歳の時の写真だと思われる。

4．エイミーさんの情報

90歳を過ぎた今でも元気にしておられる伊地知共喜の娘エイミー・モリ・イジチさん（長沢と暮らした経験のある唯一の生存者。カリフォルニア在住）が筆者の牛島についての問いに答えて，2021年７月18日付で次のような返事をくれた。

牛島ファミリーについてのお尋ねでしたね。はい，私たちは，初期の頃には古なじみの本当に親しい友人同士でした。私たちは，シマファミリーの住んでいたバークレーとサンタローザの間で，何度も何度も訪問し合いました。名前は「シマ」と略していました。ご夫婦の他に３人の子供さん—長男「東豪」，「妙子」「卓爾」—がいました。東豪は農園を続け，ストックトン近くの三角地帯でじゃがいもとその他の農産物を栽培しました。卓爾はカリフォルニアで電気技術者になりました。妙子は外交官と結婚し日本に住んでいましたが，1948年から1949年頃に２人のお子さんとともにアメリカに戻ってきました。もちろん３人はすでに亡くなっています。牛島農場は大成功して，一家は非常に特権的な生活をしていました。私は残された子孫たちに何があったかについては知りません。私が知っていたり覚えていたりすることはそれだけです。ぜひ付け加えておきたいことは，私の家族が戦争終結時にカリフォルニアに帰ってきたあと，定住する家を見つけるまで，数か月にわたってシマ農場に住んだことです。

「カリフォルニアに帰ってきた」というのは，伊地知家の人々が第二次世界大戦中の1942（昭和17）年頃から３年間にわたりアーカンソー州の収容所キャンプに強制収容されていて，戦後に，もともと住んでいたカリフォルニアに帰ることを許されたことを意味している。この大変な時に牛島家は，長沢と牛島謹爾の友情に基づき伊地知家を助けたのである。その絆は実に強いことがわかる。

エイミーさんの「本当に親しい友人同士でした」という言葉や「何度も何度も訪問し合いました」という言葉もそのことを物語っているが，戦後にお世話になったことについて「ぜひ付け加えておきたいことは」と前置きをしていることからは，エイミーさんが彼らの絆をとても大切に思っていたことがわかろう。これもすべて長沢と牛島謹爾の深い親交の結果である。

これまで見てきたこととこのエイミーさんの証言から長沢と牛島の関係が明らかになった。このような二人の関係については，上坂昇が，1903（明治36）年に発行された『成功と失敗』という本の中で，長沢が成功者としてトップに紹介されていて二番目が牛島だ，と述べ，「この二人は明治・大正・昭和を通じてよくセットで紹介されている」と言っている。また上坂は別のページでも，菊池寛が『海外に雄飛した人々』（1941）の中で長沢と牛島を子供にわかりやすく語っていることも紹介している。

だが，筆者がこの論の冒頭で拙著からの引用を示したことでわかるように，長沢と牛島の深い関係は今までほとんど知られていなかったことである。日本人の初期のアメリカ移民史にとっても重要な事実がわかって来たと言えよう。

謝辞

１．貴重な写真をご提供いただいた薩摩藩英国留学生記念館に心よりお礼申し上げます。

２．貴重な情報をご提供いただいた米国カリフォルニア州在住のエイミー・モリ・イジチさんに心より感謝申し上げます。

３．貴重な情報と写真をご提供いただいた牛島謹爾研究家の中畑義明先生に心よりお礼申し上げます。

参考文献

犬塚孝明（1974）.『薩摩藩英国留学生』東京：中公新書.

――――（2013）.「長沢鼎（かなえ）―祖国近代化のはざまで―」『新薩摩学　知られざる近代の諸相変革期の人々』鹿児島：南方新社.

Japanese American Curriculum Project, Inc. (1985). *Japanese American Journey The Story of A People* San Mateo, California: JACP, Inc.

門田明（1991）.『若き薩摩の群像』鹿児島：春苑堂かごしま文庫１.

門田明，テリー・ジョーンズ（1983）.『カリフォルニアの士魂――薩摩留学生・長沢鼎小伝』東京：本邦書籍.

Kadota, Paul Akira and Terry Earl Jones (1990). *Kanae Nagasawa—A Biography of a Satsuma Student—* Kagoshima：Kagoshima Prefectural Junior College.

上坂昇（2017）.『カリフォルニアのワイン王　薩摩藩士・長沢鼎―宗教コロニーに一流ワイナリーを築いた男』東京：明石書店.

「九州の王様たち　その軌跡」『九州王国』2021年５月号．鹿児島：エー・アール・ティー株式会社.

LeBaron, Gaye & Bart Casey (2018). The Wonder Seekers of Fountaingrove. Historia Ⅱ Publication.

宮下亮善（編）（2009）.『西郷（せご）どんと薩摩士風』鹿児島：西郷隆盛公奉賛会.

森孝晴（1998）.『椋鳩十とジャック・ロンドン』鹿児島：高城書房.

――――（2014）.『ジャック・ロンドンと鹿児島―その相互の影響関係』鹿児島：高城書房.

――――（2018）.『長沢鼎　武士道精神と研究者精神で生き抜いたワインメーカー』鹿児島：高城書房.

――――（2020）「日本ワインのルーツに長沢鼎がいる可能性について」『鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告17』鹿児島：鹿児島国際大学ミュージアム.

森孝晴，三木靖（2016）.『鹿児島歴史の旅―島津藩政と「薩摩藩英国留学生」―』（平成27年度特別講演会・かごしま県民大学中央センター連携講座解説冊子）鹿児島：鹿児島城西ロータリークラブ・鹿児島国際大学

長沢鼎（1871）.『長沢鼎日記』串木野：串木野市役所保管.

――――（1980，1994，1997，1998）.『長沢鼎日記』の翻刻『鹿児島県立短期大学地域研究所「研究年報」』第９号（1980年），第23号（1994年），第26号（1997年），第27号（1998年）.

長沢鼎常設展示室兼資料室所蔵資料（鹿児島国際大学内，約400点）

新渡戸稲造（1993）．奈良本辰也（訳）.『武士道』東京：三笠書房知的生きかた文庫.

――――（2009）．奈良本辰也（訳）.『英語と日本語で読む「武士道」』東京：三笠書房知的生きかた文庫．原著は1900年に出版.

Nitobe, Inazo(2007). *Bushido The Soul of Japan.* Tokyo: IBC Publishing, Inc.

多胡吉郎（2012）.『海を越え，地に熟し　長沢鼎　ブドウ王になったラスト・サムライ』東京：現代書館.

中畑義明「牛島謹爾年表」

――――「“ポテト王”と呼ばれた在米日本人協会長　牛島謹爾」

鷲津尺魔（1933）.『長沢鼎翁伝』：鹿児島国際大学蔵.

渡辺正清（2013）.『評伝　長沢鼎　カリフォルニア・ワインに生きた薩摩の士』鹿児島：南日本新聞開発センター.

Yoshimura, Toshio (1981). *George Shima Potato King and Lover of Chinese Classics* Fukushima: Taiseido Insatsu

Shuppanbu.
——— (1987). *George Shima: His Benefactors and Friends.*